

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 渡邊 拓也

提出年月日 2014 年 3 月 30 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文

うつ病と後期近代

英文

Depression and late modernity

【研究のねらいと目的】 (600 字程度)

「後期近代」という時代は、現代の日本においてその第二段階へと移行しつつあるように見える。つまり、1970 年代以降の記号消費と高度情報化（文化・情報資本）の動きは勢いを失って後景に退き、代わりに感情労働と人々のつながり（社会関係資本）へと政治経済的な力点がシフトしつつあるように見える。例えば、一方では家族や地域コミュニティの親密な人間関係へのノスタルジックな回顧がなされたり、友愛と歓待のアジアン・ホスピタリティが、そのまま観光ビジネスの商品となったりする。だが他方では、人間関係構築やコミュニケーション能力の重要性があまりにも強調されることによって、過剰包摂（J. ヤング）と過度のノーマライゼーションが起こるとともに、新たな社会病理——孤独死、ひきこもり、現代型うつ病など——が生み出されている。

ときに、こうした新たな社会病理の出現は、福祉そのものに危機が訪れたことを示している。後期近代の福祉（自立支援）は、排除された存在に手を差し伸べはするものの、彼らを厳しい競争社会のヒエラルキーの底辺部へと組み込んでがんばれと背中を押し出すような、どこか残酷な役目しか果たせないものになっている。だからこそ今日、地域コミュニティ（地域活性化）への再要請が起こっているとも言えるだろう。うつ病などの病理を、単に医学的問題ととらえるのではなく、社会的な関係性の形成（中間圏）を視野に入れた、より広い文脈から再検討していくことが喫緊の課題なのである。

【研究業績】 学会報告・論文など

<論文>

・渡邊拓也「中間圏の変容：〈共〉から〈社交〉へ　バヴァルダージュ空間を中心に」、秋津元輝・渡邊拓也共編著『中間圏：親密性と公共性のせめぎ合うアリーナ』（京都大学出版会、2014 年刊行予定）、第 1 章。

・渡邊拓也「〈絆〉の理論から〈場〉の理論へ」、秋津元輝・渡邊拓也共編著『中間圏：親密性と公共性のせめぎ合うアリーナ』（京都大学出版会、2014 年刊行予定）、終章。

【成果の概要】（800字程度）

中間圏研究から見えてきた新たな親密性とは、もはや地縁血縁といった確固たる基盤には支えられず、むしろ人々が何らかの〈場〉へとアクセスし、コミュニケーションを取り続けることによってその都度（「盛り上がり」を得て）再形成されるような、一時的ではかない関係性だったと言える。後期近代においては恋愛関係のゴール地点も必ずしも婚姻（血縁形成）ではなくなっており、愛の関係としての親密性は、あるいは本来の一時的性質を取り戻したとも言えるのかもしれない。だが中間圏研究にとって重要だったのは、むしろもうひとつの親密性の方だった。それは友愛ないしは友情（friendship）のことである。ガバナンスは市場や市民団体に関してはその公益的性質による貢献を期待したが、コミュニティに関しては友愛や紐帯のような親密的連帯に支えられた相互扶助を期待していた。

後期近代に見られる新たな友愛は、〈場〉を中心として生まれる「漠然とした信頼関係」のようなものと言える。共通目的を持って集合した場合に顕著なのだが、中間圏においては、その空間に集まった人々の間に、ある種のパートナーシップが発生することがある。もちろんこの信頼関係は、裏切られない保証のどこにもないような、言わば根拠の無い信頼であり、フリーライディングを容易に許すようなものでもある。またその関係が固定化していけば、ガバナンスに巻き込まれ利用される恐れもある。しかしながら、この見ず知らずの他者たちの善意を無条件に信頼し、仲間として共に歩むという感覚は、グローバル化時代の多文化共生社会のあり方について考える上で、極めて重要な着眼点となるはずなのである。グラノヴェッターの言葉を借りつつ述べるなら、閉鎖的コミュニティにおける同質な個人同士の「結束型」（ボンディング型）の関係ではなく、異質な他者同士の「橋渡し型」（ブリッジング型）の関係の中で生まれてくる信頼関係にこそ、グローバル化時代の共生社会を描きだすための鍵が隠されている。そしてこの漠然とした信頼を醸成させるにあたって重要な条件となるのが、中間圏という開かれた〈場〉の存在なのである。

【通信欄】